



照明探偵団通信

vol. 41 Shomei Tanteidan Tsu-shin

東京調査：神楽坂 歴史の残る街並みに息づく灯り

2010.09.24 井本有衣子 + 中村美寿々

江戸時代に花柳界として栄えた街並みを、現代に残す神楽坂。古い料亭や居酒屋が軒を連ねる路地には、行燈の灯りや店先の暖かい光が低く溜まり、新宿区という都心であることを忘れさせる。歴史ある街に自然と息づいている灯り、そしてその街を生かす灯りを調査した。

今回の調査では、神楽坂上と坂下を結ぶ400mほどの坂道＝神楽坂通りを軸に、その両脇に広がる昔ながらの街並みを歩いた。観光協会やNPOによる散策マップを頼りに、昔ながらの細い路地や商店街、寺社や史跡、石畳の坂道をめぐった。外濠を挟んだ対岸にある高層マンションの屋上から夜の神楽坂を俯瞰すると、写真中央から右側にかけて広がる神楽坂の街は、池袋や新宿の高層ビルの白い明かりを背景に、色温度の低い光を低層の建物の間に溜めこんでぼんやりと暗く沈んでいた。



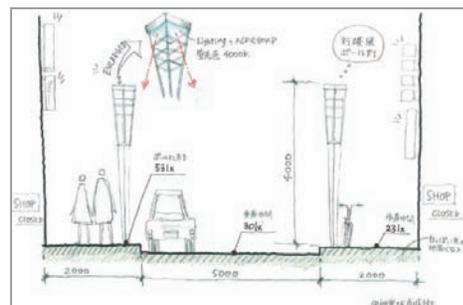
神楽坂通りのラインだけが明るく浮き上がり、外濠通りに流れ込む光の川のようなのである。

■メイン通りの賑わい

街区を中心として明るく賑わう神楽坂通りの街灯は区がデザインを公募した特注器具で、行燈の枠をイメージさせる和風のデザインが街の雰囲気によく似合っていた。しかし中のランプは色温度の高い光が眩しく、硬いような冷たい印象だった。行燈が似合うこの街の街路灯にはもっと温かみのある光色のランプがよいのではないかと。神楽坂通りでは明るいところで150lx程度はあった路面照度が、路地では街灯直下でも20lx程度と、極端に低くなる。この居心地の良い暗さのなかへ、そぞろ歩く人々が吸い込まれていく。明るい大通りではなく裏に広がる暗い路地が目的地となっている神楽坂は、闇が残る街だと思った。(中村美寿々)



神楽坂商店街への入口にはデザインされた行燈風ポール灯が門構えのように立っている。



ポール灯の色温度がもう少し低ければ、もっと心地よい空間になるに違いない。

■古き良き灯りの名残り

神楽坂にはかつての面影が残る路地や、活気溢れる横丁など魅力的な横道が色々ある。その中でもおすすめの横道が兵庫横丁だ。「兵庫」の名は中世期にこの辺りが武器・兵器に関係する郭だったことからそう呼ばれているようだ。煌々とした神楽坂通りから横道に入ると途端にヒューマンスケールの灯りへと変わる。

石畳と黒塀で構成された路地に出合えたり、突然あらわれる小さな階段やかわいらしいお店などつい足を止めてしまう風景がそこにはあった。通路でも暗いところで0.2lxほどの照度でありながら道行く人は闇を楽しんでいるようだった。浅草のような下町ではなく、都心の真ん中である神楽坂でも随所に江戸からのあかりの情緒が残されていたのが驚きであった。



何度も歩いていると神楽坂通りから、小道に入る入口があらこちらにあることに気付く。この先には何があるのだろうか・・・。



兵庫横丁は石畳・黒塀・見越しの木々ともっとも神楽坂らしい一角である。



各階には違う店舗が入っているが、建物全体で色温度が統一されまとまった印象を受ける。

■老舗料亭がひっそりとたたずむ小道

この街の特徴である坂のひとつに芸者新道と呼ばれる小道がある。江戸時代に待合や置屋、料亭が集まっていたころ「ロクハチ」（宴席の6時と8時のこと）ともなると芸者さんたちが近道に利用していたことからそう呼ばれているそうだ。表通りの活気ある商店街とは対称に、この裏通りには老舗料亭がひっそりとたたずんでいる。現在では、料亭の向いには高層マンションが建っている。蛍光灯のポール灯がそれを隔てる道全体を明るく照らしメリハリのない空間を作っていたせいか、事前情報がなければ料亭があることに気付けなかっただろう。はたして当時は、この付近の光環境はどのようなものだったのだろうか。そして、江戸時代の美的生活理念を「通」だとか「粋」だと表現するが、光についての当時考え方はどのようなものであったのだろうか。

(井本有衣子)



神楽坂と平行に走る小道（芸者新道）。最盛期は神楽坂に芸者置屋や料亭がひしめき並んでいたそうだ。



芸者新道を抜けると本多通りに入る。ポール灯の円形型をした電球色の灯りと看板照明の青白い蛍光灯の光が、妙に空間にマッチしている。灯りと形態の関係も興味深い。

■路地で出迎えてくれた光

路地を照らす光は、客人をもてなす店先の照明や窓の漏れ光など私的な明かりばかりで、どれも低い位置に溜まっていた。むき出しの白熱電球や蛍光灯といった素朴すぎて無機質になってしまいそうな光源が、古い街並みと雰囲気や大事にしようという神楽坂の人々の思いによって情緒的で親密な光に変化し、あたたかさを醸し出しているように感じられた。

訪れる人を出迎えるような光は、公共の統一的な計画によるものではなく、街を生かそうとする人々による自然発生的なものなのだろう。路地に存在する光で最も高い位置にあったのは、頭上6~7mでグレアの光を発する公共の街灯だった。



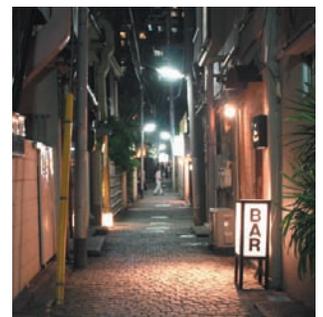
店の看板、入り口でメニューを照らす光、店先の行燈、建物内部の漏れ光、街灯、の5つが、路地で存在するおとな光の要素。

■街に息づく灯り

神楽坂では、行燈や提灯といった昔ながらの照明が使われなくなった現代でも、それらの灯りの情緒が歴史ある街並みとともに随所に残っていた。街並みに合う意匠として、積極的に和風のデザインやレトロな器具が選ばれている印象であった。まぶしい光だと敬遠しがちなむき出しのランプも、低い軒先や土間の天井に取り付けられることで、路地に漏れてくると自然な間接光に変化していた。神楽坂で感じる灯りのあたたかさは、古くから残る街並みが育てているものだと思う。

街並みから生まれてくる光に満たされている一方、街路灯やライトアップなど公共の光には、街並みを生かす工夫がもう少しあってもよいのではと感じた。例えば神楽坂の史跡として有名な善国寺は、提灯の明かりと境内のポール灯が白く点るだけで演色性も悪く感じられ、物足りない印象を受けた。参拝者も多く赤色の美しい建物なので、夜の表情を印象付ける光が工夫されたらよいと思う。神楽坂の光は、歴史ある街の雰囲気や頼るだけでなく、もっと街の魅力を引き出す余地がありそうだ。

(中村美寿々)



江戸時代から神楽坂の中心にあった毘沙門天善国寺。境内は路面照度30lx程度で割と明るい。夜中でも多くの人が、門前で足を止めていた。

■事務局からのお知らせ

2011年照明探偵団企画運営委員会『The Squad』が結成されました！

2010年、照明探偵団は20周年を迎えました。今までの主となる活動は、団員皆さんが参加できる街歩きやサロンでした。その活動にさらに皆さんの声を反映させるため、企画、運営を事務局と一緒にやって頂ける方を募集しました。

10月25日にキックオフミーティング（Vol.0）が行われ、委員8名が決まりました。年齢も職業も幅広く、充実した街歩きやサロンを期待できる一年になりそうだと感じています。

街歩き年間テーマも決定しました。『集い』や『集いのあかり』という人⇄光⇄場のつながりをテーマとした企画が進んでいます。

またサロンは、各街歩きの後にその反省会と、もっと気楽に光について語るという、以前の形に戻ります。是非、皆さんの「光・あかり・照明」にまつわる話を持ち寄ってください。

2011年は3回の街歩きとサロンを計画しております。

寒い時期ではありますが、その寒さを忘れるほど、きれいなあかりとの出会いがあることと思います。

来年の探偵団活動により多くの方の参加をお待ちしております。

（東 悟子）

【照明探偵団の活動は以下の19社にご協賛頂いております。】

ルートロンアスカ株式会社
岩崎電気株式会社
カラーキネティクス・ジャパン株式会社
パナソニック電工株式会社
ヤマギワ株式会社
マックスレイ株式会社
DNライティング株式会社
エルコライティング株式会社
株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパン
東芝ライテック株式会社
コイズミ照明株式会社
マーチンプロフェッショナルジャパン株式会社
タルジェットイ ポールセン ジャパン株式会社
株式会社遠藤照明
湘南工作販売株式会社
トキ・コーポレーション株式会社
山田照明株式会社
株式会社ウシオスペース
森山産業株式会社



探偵団通信に関してのご意見・ご感想等随時受付中です！
お気軽に事務局までご連絡ください。